Ⅲ－7章　アフリカにおける経済危機下の農村変容

――コンゴ農村調査報告――

武内　進一

はじめに

サハラ以南アフリカ（以下アフリカと略する）諸国経済のパフォーマンスの悪さが喧伝されるようになって久しい。実際，マクロ経済指標を見る限り，アフリカ諸国は概ね1980年代以降長期的な経済危機下にあり，現在に至るまで状況の目立った改善は見られていない。しかし，マクロ指標の悪さについては数多くの指摘がある一方，これらアフリカ諸国の経済社会が長期的な経済危機の下でどのような構造変容を遂げているのかという点に関する分析は未だ十分に深化していない。本稿は，筆者が実施した実態調査に基づいて一農村の変容過程を分析し，それによって経済危機下のアフリカ農村における社会経済的変容を理解するための手がかりを得ようとするものである。

本稿における筆者の問題関心は，主食食糧の商品化が農村経済に与えるインパクトにある。アフリカにおける農産物の商品化と言う場合，コーヒーやココアなど世界市場向け換金作物についてはしばしば分析されてきたが，主食食糧の商品化に関する研究蓄積は相対的に少ない。しかしながら，この問題は今日のアフリカ農村の変容を考える上で非常に重要である。

周知のようにアフリカでは，ここ数十年の間に急速な都市化が進展した。(1) 近年アフリカ各国を襲っている経済危機の下でも，スピードこそ衰えたものの都市への人口集中の傾向に変化はない。急速な都市化は，別の側面からみれば，

都市における食糧需要の急速な拡大を意味する。こうした状況下，農村は都市向け食糧生産活動を活発に展開しており，それが農村の経済社会に対して大きなインパクトを与えている。マクロ経済指標は停滞を続けていても，農村レベルではダイナミックな変化が進行しているのであり，こうした動きは近年の経済自由化政策とその一環としての農産物市場自由化の流れのなか，アフリカ各国でさらに激しさを増している。

本稿で取り上げるコンゴは，[2] 34万平方キロメートルの国土に約250万人が居住する人口希薄国であるが，そのうち約70万人が首都ブラザヴィルに集中しており，1988年段階で都市人口比率は52.7%とアフリカで最も高い水準にある。[3] 1986年以降，深刻な経済停滞が継続しているにもかかわらず，現在もなお都市人口は減少する気配を見せていない。

著しい都市化現象に加えて，独立後の農業・農村政策が見るべき成果をもたらさなかったことから，コンゴの農村に関する既存の研究においては，農村社会の崩壊という局面を強調した論調が目立つ。[4] こうした議論では，都市化は直ちに農村の衰退と結び付けて理解される傾向にあるが，言うまでもなくその農村経済への影響はそれほど単純ではない。コンゴについては衰退する農村・縮小する農業といったイメージばかりが流通している感があるが，実際の農村の変化はそうした単線的変化では捉えられないものがある。

以下では，都市における食糧需要の高まりに対応して，村が急速に拡大してゆく事例を取りあげる。ブラザヴィルの比較的近郊に位置する地域では，近年の食糧需要の高まりに対応して，主食であるキャッサバの生産が急増した。本稿は，ブラザヴィル向けキャッサバの新たな主産地として登場したこの地域（マチ－Maty－）を取り上げ，ブラザヴィル食糧経済に占める重要性を示した後に，その代表的な1村落（ビノケナ－Binokena－村。以下ではB村と略記する）における実態調査に基づいて，村が拡大する過程をキャッサバの生産システムと関連付けながら明らかにし，また最近になって浮上してきた生産ボトルネックについて説明する。その上で，こうした経済危機下の農村変容が持つ含意を最後に検討したい。

1　マチの重要性と調査村

1　マチの重要性

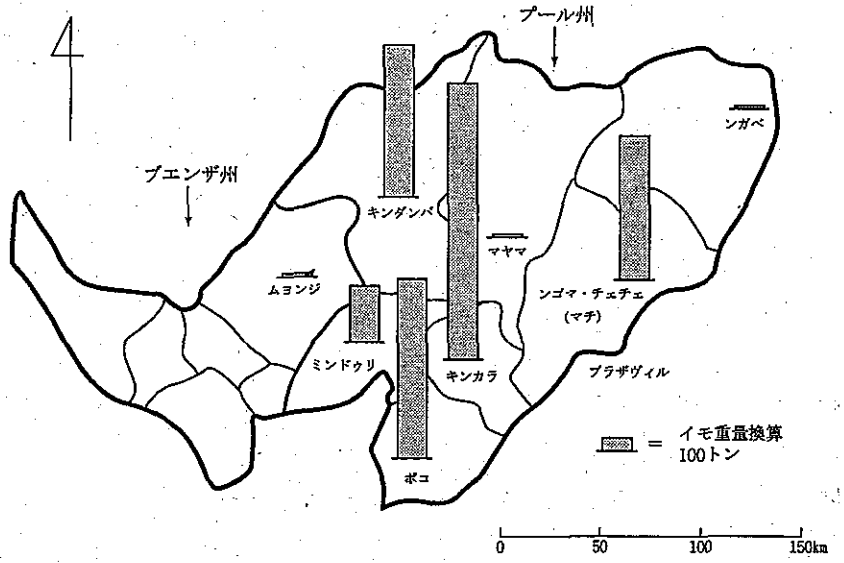
筆者はコンゴ滞在時にブラザヴィル向けキャッサバ流通に関する調査を実施した。キャッサバ生産地としてのマチの重要性を認識したのは，この調査を通じてである。調査の詳細については別稿に譲り，[5] ここでは簡単に結果をまとめておく。

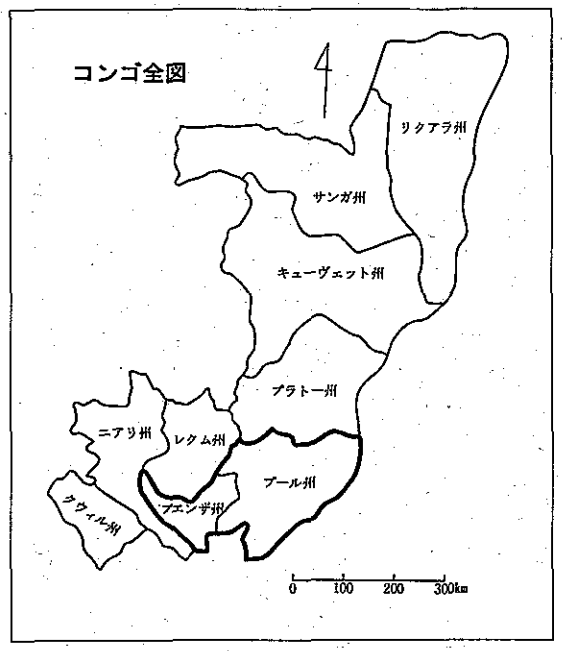
ブラザヴィルで消費されるキャッサバのほとんどはコンゴ国内の農村部で生産される。ブラザヴィル向けキャッサバ製品の流通経路としては，[6] トラック輸送，船舶輸送，鉄道輸送の三つがあるが，その中ではトラックによる流通が圧倒的に重要である。トラックによってブラザヴィルに運ばれてきたキャッサバ製品は，主として二つの市場に出荷される。すなわち，市の北部に位置するタコンボ（Takombo）市場と市の南部にあるコミッション（Commission）市場である。マチからはこのコミッション市場に向けてキャッサバ製品が出荷される。

第1図にコミッション市場に対するキャッサバ製品の出荷地と出荷量を示す。ここで，ンゴマ・チェチェ県として示されているものは全量がマチからの出荷分である。マチから出荷されるキャッサバ製品はすべてフフ（乾燥キャッサバ）であり，それはコミッション市場に出荷されるキャッサバ製品総量の17%，フフの50%を占めている。コミッション市場へのキャッサバ製品出荷量はブラザヴィルに対する総出荷量の3割以上に上るから，[7] マチはブラザヴィル住民が消費するキャッサバ製品の主産地の一つだと言ってよい。

このように重要なキャッサバ生産地でありながら，マチという名称は行政上の区分としては存在しない。第2図に示すようにマチとはマチ川南部に点在する村落を総称する地名だが，これはあくまでも通称であって，その名を冠した行政単位が存在するわけではない。この地域は，バテケ台地（Plateaux Bateke）の一部をなすンツォヤン平原（Plaine Ntsoyan）に含まれるが，川が少なく水利が悪いために近年までほとんど人が住んでいなかった。[8] 行政的なカバーが遅れた理由はそこにある。これはすなわち，キャッサバ生産地としてのマチの歴史

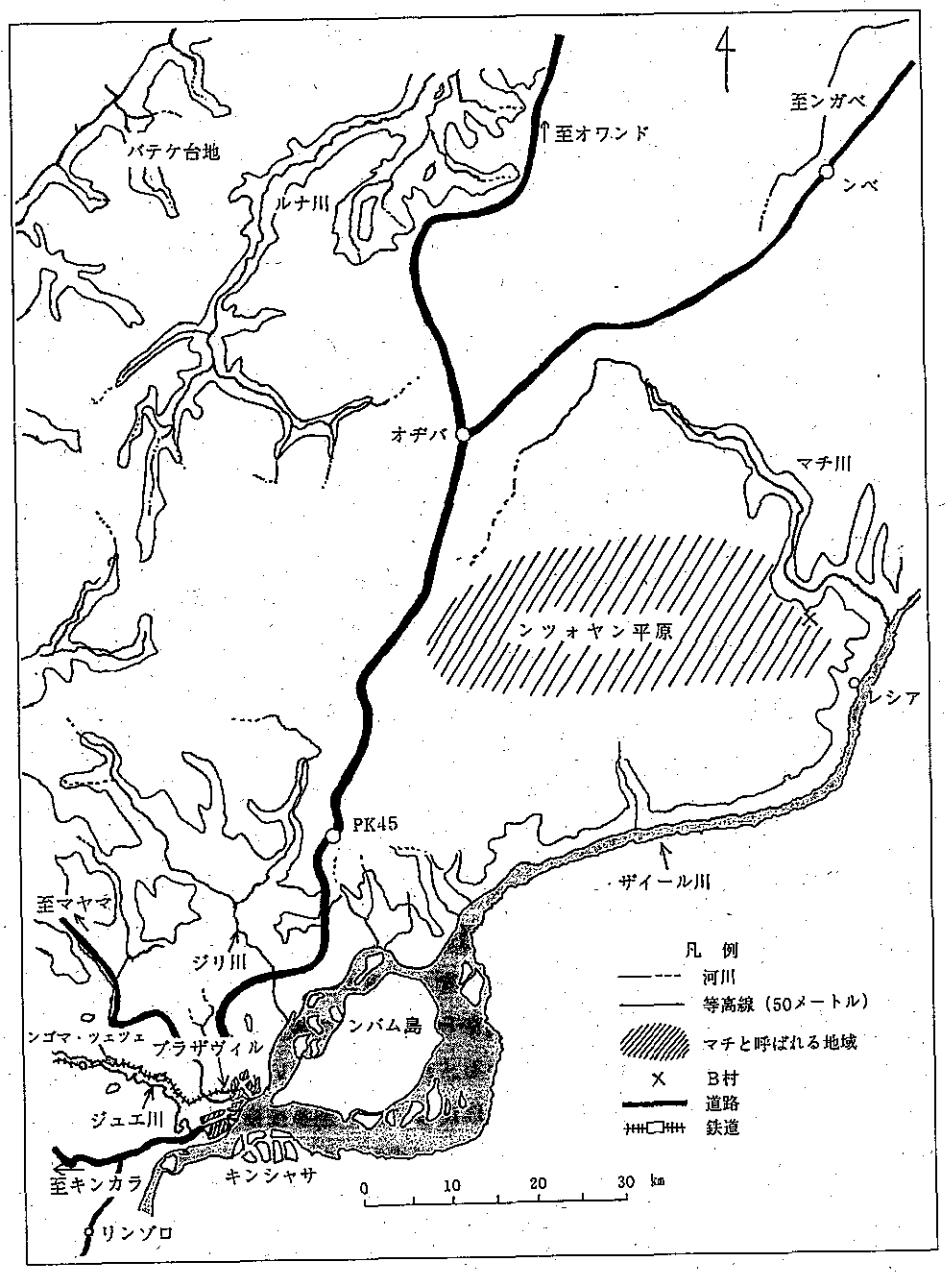
第1図　コミッション市場への県別キャッサバ出荷量（1993年4月～94年3月）





（出所）　筆者調査による。調査の詳細については，武内進一「コンゴのキャッサバ流通―生産地から卸売市場まで」『アジア経済』第37巻第6号，1996年6月，29-58ページ，参照。

第2図　マチおよび調査村の位置



が非常に浅いことを意味している。

2　調査村

筆者は1993年10月，および同年12月から翌1994年１月にかけて，マチの一村落であるＢ村で住み込み調査を実施した。調査対象としてＢ村を選択した理由は二つある。第１に，村の人口規模が大きいことである。マチの諸村落の人口データ等が存在しないため，この地域に幾つの村落があり，どの程度の人々が住んでいるのか，といった基礎的な情報は得られていない。しかし，筆者が見たマチのいくつかの村落の中ではＢ村の規模が最も大きく，村人もＢ村がマチ最大の村落の一つだと自認している。第２に，ブラザヴィルとの間がトラックの定期便で結ばれていることである。マチにおけるキャッサバの生産拡大を考える上で，トラック流通は最も重要な要因の一つである。トラックの往来によって，マチ住民は生産物の販路を確保でき，結果的に現金収入が保証される。いわばトラック輸送というインフラに支えられて，マチのキャッサバ生産の急増が可能になったのである。この意味で，定期的なトラック輸送が確保されている村こそが，マチにおける生産拡大を考察する上で典型的な事例を提供すると考えられる。こうした二つの理由から，マチ全体に敷衍して考察することが可能な農業生産構造を持つ村落としてＢ村を選択した。

マチの諸村落の位置がわかる正確な地図は存在しない。村の大まかな位置については第２図に示すとおりである。ブラザヴィルから国道２号線を北上し，舗装道路を75キロメートルほど進んだ地点で未舗装路に入って東に方向を変える。その後，見渡す限りの平原の中をトラックの轍に沿って50キロほど行くとＢ村に到着する。その間５～６ヵ村を通過するが，そのいずれに比べてもＢ村の規模が最も大きい。村はマチ川から５キロ程度，ザイール川からも10キロ程度の地点に位置している。ザイール川から近いことで後述するザイール人出稼ぎ労働者のアクセスが容易になっている。川に比較的近いとは言っても水の便は悪い。もちろん水道の設備はなく，住民は井戸を掘る技術を持っていない。したがって，雨水に依存するか，[9] マチ川まで水を汲みに行かなければ水を得ることはできない。[10] さらに，村はンツォヤン平原の東端部で標高600メートル程度の地点にあるのに対して，川はいずれも標高300メートル以下の地点を流れ

ており，川の付近は勾配の急な谷になっている。ポリタンクに水を入れて運搬する者もいるがこの作業は容易ではなく，多くの住民が雨水をそのまま飲料水として利用している。

調査は，村に居住する全ての世帯主に対して，筆者が質問表に基づくインタビューを実施する形式で行われた。ここで，世帯には「経済的に独立して暮らしている人，家族」という常識的な概念をさしあたり当てはめ，世帯主はその家長としたが，原則として男性を家長とみなした。[11] 村において，コンゴ人は一般に核家族の単位で居住している。この居住の単位は経済的にも独立した単位であるため，これを基本的に世帯とみなした。[12] ザイール人出稼ぎの多くがそうであるように単身で生活している者もいるが，彼らは経済的に独立していると考えられ，各人を世帯主とみなした。

調査対象となったのは，39のコンゴ人世帯と126のザイール人世帯であった。[13] これらはいずれも筆者の調査時に在村していた世帯であるが，後述するように村には不在地主も存在する。不在地主については直接調査することはできなかったが，ザイール人雇用労働者からの聞き取りなどによって人数を確定した。

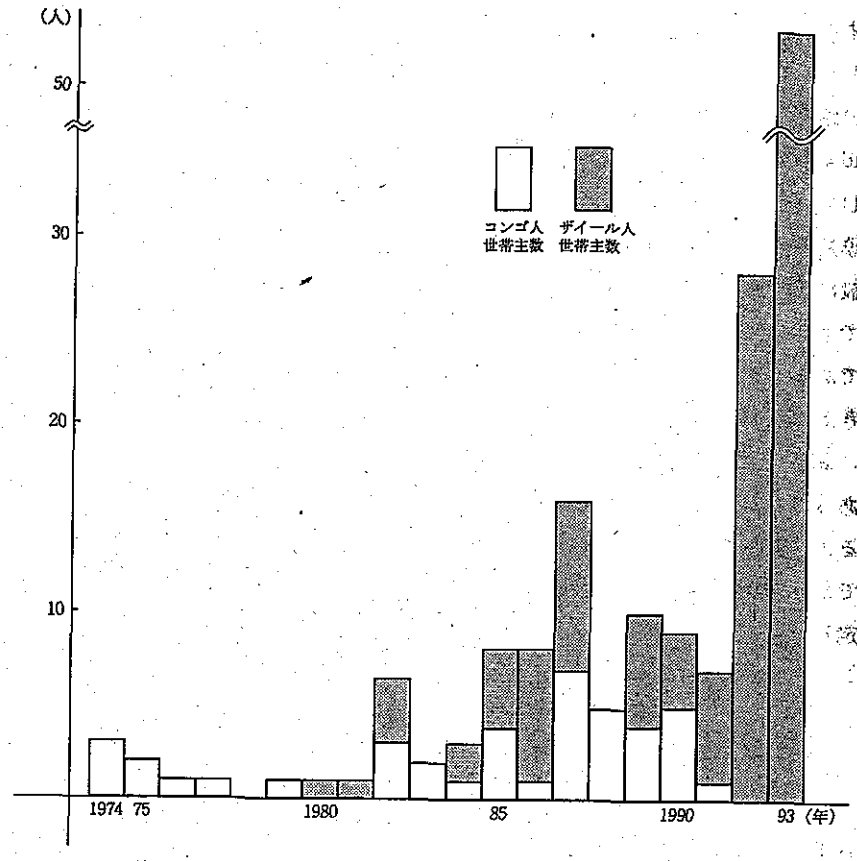
2　Ｂ村の形成と拡大

1　村の形成

マチにおける他の村と同様，Ｂ村の歴史もまた浅く，現在の地に村が作られたのは1978年のことである。第３図は村人がマチないしＢ村に移住してきた時期を示している。村に居住するコンゴ人のうち，1974～76年にマチに来たと答えたグループが村の開拓者とされている。

聞き取りによれば，彼らはもともとブラザヴィルに居住していたが，1970年代になって，当時マチの数少ない村落の一つであったマチ・サントル（Maty-Centre）に住んでいた男に誘われてこの地に住むようになった。はじめのうちはマチ川沿いの森林で動物を狩り，それをマチ・サントルの男に販売して生計を立てていた。元々，村はもっとマチ川に近い奥まった場所にあったが，[14] 1978

第3図　B村への来訪年

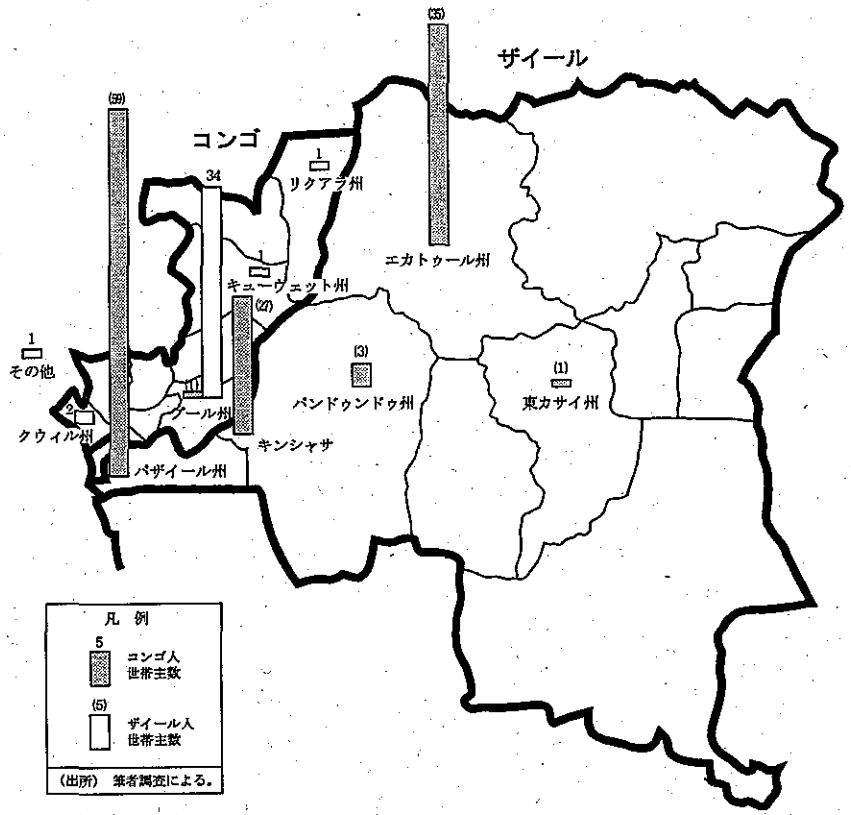


（出所）筆者調査による。

年に現在の地に移った。この地の方がトラックがアクセスしやすいからである。

この地は元来，部族としてはバテケ（Bateke）の支配領域であるが，B村の創始者たちはバラリ（Balari）である。第4図に示すように，現在も村のコンゴ人居住者のほとんどはプール州で生まれており，彼らはバラリである。[15] バラリは元来ブラザヴィルに近いコンゴ南部に居住していたが，植民地期以降ブラザヴィルへ大量に人口移動し，現在ではブラザヴィルの人口に占める比率が最も高い部族の一つである。

第4図　B村居住者の出生地



（出所）筆者調査による。

バラリの入植者たちは，畑を作るようになってから数年間，近くの町に住むバテケの地主に毎年地代を払った。[16] 地代は年間2万6000 CFA フランで，[17] これは当時村にあった二つの協同組合からそれぞれ1万5000 CFA フランおよび1万1000 CFA フランを徴集して支払いに充てた。[18] 社会主義体制下のコンゴは農村協同組合設立を奨励しており，B村にも協同組合がつくられていたのである。

しかし数年後，B村の住民たちはバテケに対する地代の支払いを止めた。彼らは，バテケの地主に対して，協同組合は国家の推進する事業であり，したがって協同組合事業の下に行われる土地利用についてバテケに地代を支払う必

要はないと主張して，それを認めさせたのである。しかし実際のところ，コンゴの多くの協同組合がそうであったように，B村の協同組合はかなり名目的なものであり，筆者が調査した1993年の時点では全く機能していなかった。B村の住民は，協同組合事業の背後にある国家の威信（およびその脅威）を利用して，バテケの地主を脅し，無償で自由に土地を耕作する権利を手に入れることに成功したのである。

第1表　ブラザヴィルの人口推移と都市面積

年	人口（人）	都市面積（ha）
1901	4,250	
1911	5,400	
1925	15,000	
1945	50,000	
1947	60,000	
1950	76,000	1800
1953	86,769	1950
1957	95,000	2100
1960	99,000	
1961	122,000	
1970	200,000	
1974	299,000	6500
1978	380,000	7000
1983	501,000	7200
1984	595,102	
1988	659,835	

（出所）　1984年までは，A.Guichaoua, Destins paysans et politiques agraires en afrique centrale, Tome 2 : La liquidation du "monde paysan" congolais, Paris, L'Harmttan, 1989, P. 104.
1988年は，République populaire du congo, Ministère du plan et de l'économie, Centre national de la statstique et des études économiques, Annuaire statistique 1988, P. 7

2　村の拡大

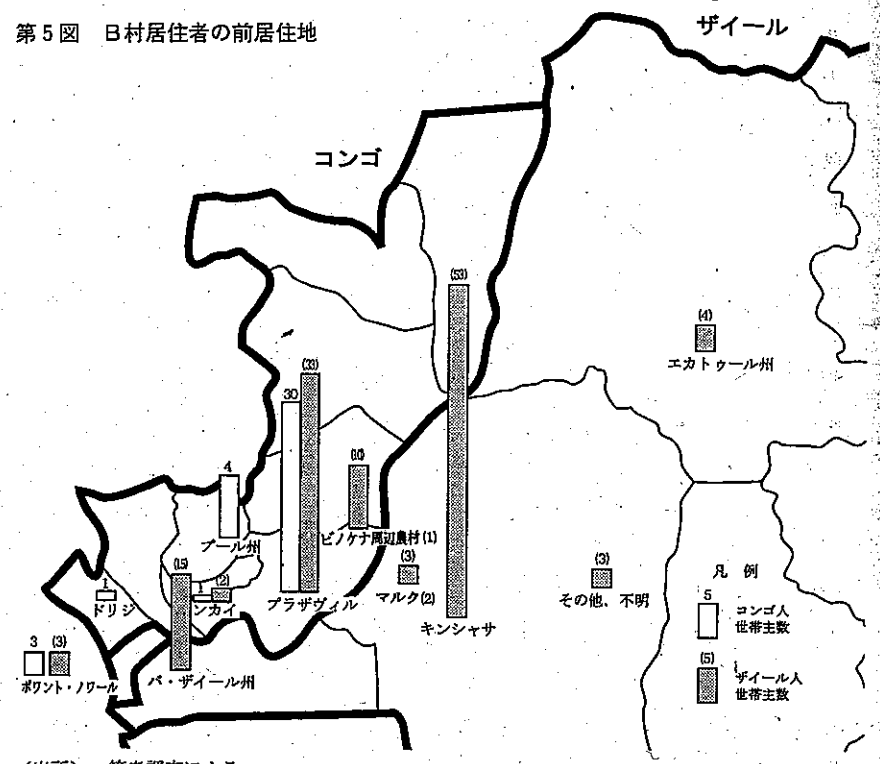
その後，第3図に示すように，コンゴ人の移住やザイール人の出稼ぎによって村の人口は急速に増加した。村の拡大はキャッサバ生産の増加と軌を一にしている。コンゴ人の移住者もザイール人の出稼ぎも，B村では農業を営み，キャッサバを販売することを生活の糧としているからである。この時期の人口流入についてはいくつかの要因が指摘できる。

第1に，急激な都市化によって農村部に新たな市場機会が提供されたことである。第1表にブラザヴィルの人口推移を示す。この間ブラザヴィルの行政区画も増加しているので単純な比較はできないが，急速に人口が増えていることは明らかである。この人口増はキャッサバをはじめとする食糧需要がブラザヴィルにおいて急激に高まったことを意味する。ブラザヴィル住民の最も重要な主食はキャッサバである。キャッサバはコンゴやザイールなど中部アフリカ諸国の主食であり，FAOによれば，コンゴ人の総摂取カロリーのうちキャッサバの比率は約4割に及ぶ[19]。都市，農村を問わずコンゴ人の食生活がキャッサバに大きく依存していることはいくつかの調査によって実証されており，例えばブラザヴィル住民の炭水化物によるエネルギー摂取の7割以上がキャッサバ製品によるものと推計されている[20]。筆者がブラザヴィルで実施した調査においても[21]，量的・質的にもっとも重要な昼食において主食として利用されるのはほとんどの場合キャッサバ（シクワングかフフ）であった。都市では輸入食糧であるパンや米も利用されるが，キャッサバに比べれば重要性は低い[22]。ブラザヴィルの人口増はそのままキャッサバ需要の増大を意味したと考えてよい。都市におけるキャッサバ需要の増大は，農村にとっては新たな市場機会の到来を意味する。村へ流入した人々は，この市場機会に対応してキャッサバ生産に乗りだしたのである。

第2に，深刻な不況によって，都市における雇用吸収力が著しく縮小したことである。都市が急激に膨張しつつあった1980年代半ば，コンゴは逆オイルショックの影響を被って深刻な不況に直面した。逆オイルショックが本格化しつつあった1985年を例にとれば，コンゴの輸出額の9割は原油によるものであり[23]，原油価格低下の影響はコンゴ経済を直撃したのである。1986年の名目国内総生産は前年の約三分の二に激減し，一人あたり年間可処分所得も前年の36万 CFA フランから22万 CFA フランに急降下した[24]。それ以降，今日に至るまでコンゴ経済は停滞が続き，1994年1月に実施された CFA フランの50％切り下げ以降も景気の回復は見られていない。都市におけるフォーマルセクターの雇用は縮小し，所得機会は減少している。第2図で，コンゴ人の移住が80年代後半以降に集中しているが，これは都市での雇用機会減少に対応して彼らが農村部に流入してきた結果だと解釈すべきであろう。

ザイール人の流入は，村に移住したコンゴ人が短期的な出稼ぎに依存した農業生産のシステムを構築したことで加速された。生産システムについては後述することとして，ザイールの経済危機に関して触れておけば，その状況はコンゴ以上に深刻である。1973年の銅価格急落に端を発したザイールの経済危機は，80年代にも一向に改善せず，その上91年，93年には生活苦と民主化過程の行き詰まりを原因として首都キンシャサで暴動が発生するなど，現在なお復興の糸口を模索している段階である。こうした経済状態を反映して，ザイールの通貨「ザイール」は著しい下落を続けている[25]。通貨価値がきわめて不安定なザ

第5図　B村居住者の前居住地

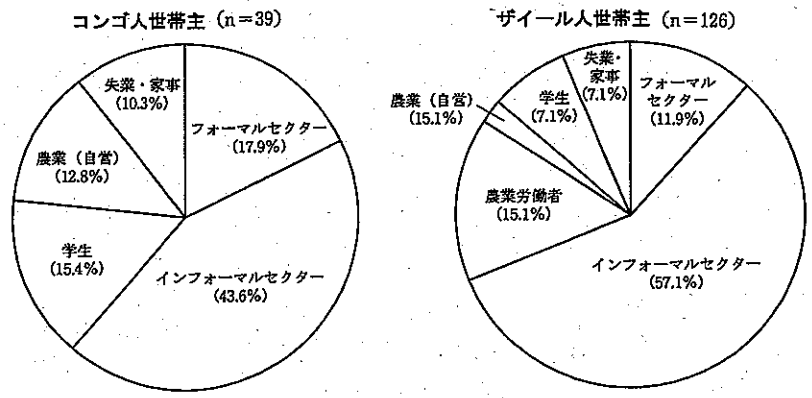


（出所）　筆者調査による。
（注1）　「ビノケナ周辺農村」とはビノケナ村周辺に点在するマチ内の農村部を指す。
（注2）　「マルク」は，ザイール川を挟んでマチの対岸にあたるザイール領の地域である。この地域は行政上はキンシャサ市に属する。

イールに比べれば，CFA フランはフランスフランとリンクしておりその価値は相対的に安定している。したがって，ザイール人の CFA フランに対する需要は強く，それが彼らのコンゴへの出稼ぎを促す重要な原因となっている。これは，コンゴ人側から見れば，きわめて安価な水準でザイール人労働力を雇用しうることを意味する。両国の通貨制度の差が，両国間の大量の労働移動を促進しているのである。

村人の前居住地と前職を示した第5，6図は，こうした状況をよく反映している。村人の前居住地を見れば，コンゴ人の場合はブラザヴィルをはじめ，ポワント・ノワール，ンカイ，ドリジといった南部の諸都市に居住した後に村に移ってきた者がほとんどである。ザイール人については，周辺農村で既に農業

第6図　村人の前職



（注）フォーマルセクターとインフォーマルセクターの区分は，筆者が便宜的に行った。フォーマルセクターの例としては，公務員，会社勤務，大使館付運転手などが，インフォーマルセクターの例としては，タクシー運転手，キャッサバ加工業，小売業，仕立屋などがある。
（出所）筆者調査にによる。

（注）フォーマルセクターとインフォーマルセクターの区分は，筆者が便宜的に行った。フォーマルセクターの例としては，会社，勤務，看護仕，教員などが，インフォーマルセクターの例としは，パームオイル加工業，小売業，市場の荷車押し，機械工，左官，仕立屋，売春婦などがある。

労働に従事していた者も見られるが，やはりブラザヴィルとキンシャサという大都市にいた者が圧倒的に多い。次に前職について見ると，コンゴ人もザイール人も小売商人などのインフォーマルセクターで働いた後にこの村に移住した者が目立っている。従来コンゴに関しては，農村から都市への人口移動は顕著だが都市から農村に向かう移動はほとんどなく，あるとしてもフォーマルセクターを引退した後の老人が隠居を兼ねて移動するに過ぎないと言われてきた。[26] しかしここでは，インフォーマルセクターで生計を立てていた者や学生など相対的に年齢の若い人々が都市から移住していることがわかる。[27] 彼らは，都市におけるインフォーマルセクター就労と農村でのキャッサバ生産労働とを比較して，農村での就労を選択したのだと言える。マチという近郊農村の労働市場は，ブラザヴィルやキンシャサの都市インフォーマルセクターの労働市場につ

第２表　Ｂ村の人口構成（1993年10月時点）

	成年男子	成年女子	未成年男子	未成年女子	計
コンゴ人	34	41	21	14	110
ザイール人	125	52	33	27	237
計	159	93	54	41	347

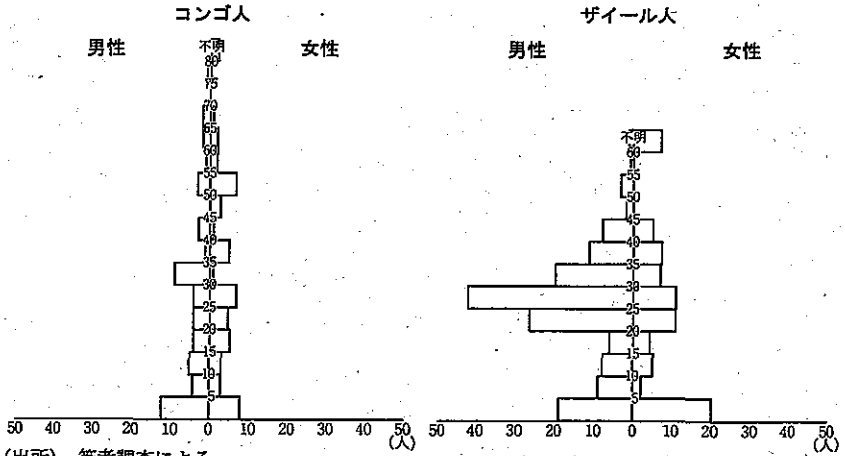
（出所）筆者調査による。　（注）15歳以下を未成年と見なす。

ながるものとして捉えるべきであろう。

このように都市と農村の労働市場が結びついた背景として，流通網の発達を指摘することができる。これは，Ｂ村への人口流入を説明する第３の要因である。流通網の発達とは，具体的にはトラックが定期的に村へ巡回するようになったことを指す。1970年代末には，マチ全体をわずか１台のトラックでカバーしており，Ｂ村にトラックがやってくるのはせいぜい月に１回程度だった。その後，漸次回数が増加し，1992年からは現在のように週に２回（火曜と金曜）トラックが来るようになった。トラック巡回の定期化によってマチにおけるキャッサバ生産は大きな刺激を受けた。まずこれによって農産物の販路が確保され，村人の現金稼得機会は急速に高まった。これはキャッサバ生産のインセンティヴを大いに高めた。また，ブラザヴィルから約100キロに位置するＢ村は，トラックに乗れば５～６時間の距離である。トラックの定期的な来訪は都市住民の農村への移動を簡便化し，農村の労働市場に心理的にも参入し易くさせたと言えよう。

こうした状況の変化を受けて，Ｂ村は1993年の調査時には347人を抱えるマチでも最大規模の農村の一つになった。人口構成上の特徴はザイール人の多さである。第２表に示すとおり，全人口347人のうち７割近くの237人をザイール人が占めている。第３図において，ザイール人の村への来訪年がこの１～２年に集中していることが示すように，彼らのほとんどは短期的な出稼ぎ労働者である。これを反映して，ザイール人においては第７図に示すように青年男子の数が非常に多くなっている。

第７図　ビノケナ村全住民の年令構成

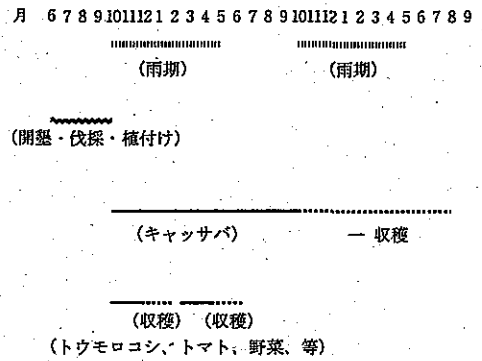


（出所）筆者調査による。

３　市場向けキャッサバ生産のメカニズム

本節では，Ｂ村で市場向けキャッサバ生産がどのようなメカニズムで行われているのかについて，主として労働力の観点から検討する。まず農業労働のサイクルについて知るために，第８図に大まかな農事暦を示す。コンゴ南部では，概ね10月半ば～５月半ばが雨季である。その間，１月～２月にかけては小乾季と呼ばれ，やや雨量が少なくなる。６月～９月の乾季には雨はほとんど降らない。村人は乾季の開墾・伐採作業によって畑を準備し，雨季直前に播種，植え付けを行う。

第８図　ビノケナ村の農事暦



（出所）筆者作成。
（注）本図は一つの畑を単位とした時の労働を示している。

ほとんどの畑において中心的な作物はキャッサバであり，キャッサバが整然

と植付けられた間にトウモロコシなど他の作物が植えられる。トウモロコシやトマトなどの作物は小乾季の頃に収穫され，さらにもう一度，作付け－収穫のサイクルがある。その後はキャッサバだけが畑に残り，キャッサバは植付けから1年経過した頃から農民の必要に応じて徐々に収穫される。村の畑は景観的にはキャッサバが非常に卓越して見えるが，これも作付けのサイクルと関係している。すなわち，作付けから半年ほどすると，ほとんどの畑には整然と植え付けられたキャッサバしか残らなくなるのである。

第3表　ビノケナ村の栽培作物

作物名	栽培世帯数
キャッサバ	39
トウモロコシ	34
野菜(注1)	30
トマト	27
唐辛子	13
ナス	9
落花生	6
ウリ	6
ヤム	5
プランテンバナナ	4
インゲンマメ	3

(出所)　筆者調査による。
(注1)　現地名 "Bari", "Mousoso" など。

栽培作物については第3表に示した。これは，全員が畑の保有者であるコンゴ人世帯主39名に，畑で栽培する作物を尋ねた結果である。全員がキャッサバを栽培している他，トウモロコシ，現地名バリ（Bari），ムソソ（Mousoso）といった野菜類[27]，トマトなどが多くの農民に栽培されていることがわかる。いずれも自給用だけでなく販売にも回されるが，農民の現金収入源として最も重要なのはキャッサバであり，他の作物は収穫時に自給分を超えた部分を適宜販売するに過ぎない。

先に第3表に示したように，B村におけるキャッサバ生産の重要な部分はザイール人出稼ぎ労働者によって担われている。そこで次にザイール人出稼ぎ労働者の労働内容について説明し，その後に彼らがコンゴ人雇用主との間に結ぶ関係について検討する。

農業労働の中で，ザイール人出稼ぎ労働者は特定の部分のみを請け負う。すなわち彼らの労働は，開墾伐採とフフ（乾燥キャッサバ）作りとに限定されており，最も重要な商品作物であるキャッサバの生産に密接に結びついている。開墾伐採労働には3種類あり，藪を払う作業（kosola と呼ばれる），藪を払った後に残った木を斧で切る作業（kokwanga と呼ばれる），そして畑に火を入れた後に土を返してキャッサバ植え付け用の簡単なマウンドを作る作業（kolona と呼ばれる）に分けられる。村では，1ヘクタールの作業についてはそれぞれ1万

5000 CFA フラン，2万 CFA フラン，3万 CFA フラン，日雇いで労働者を雇った場合には全て一日あたり1000 CFA フランと賃金が定められている。長期の雇用関係にある場合，賃金の支払いは作業の終了後ということになる。

一方，フフ作りの労働とは，キャッサバを収穫し，イモの皮を剝き，水に晒して毒を抜き[28]，それを数個に切り分けて乾燥させ，そのようにして出来上がったフフを袋に入れて出荷できるようにする[30]，という一連の作業を指す。この労働に対する報酬は現金ではなく現物で支払われる。すなわち，こうした形でフフを作った労働者は，5袋に対して1袋の割合でフフを自分のものとすることができる。いわば刈分け小作の様な形で報酬が支払われるわけである[31]。フフは，村に週2回来る商人に5000～6000 CFA フランで売れるし，自分でブラザヴィルに赴いて販売することも可能である。コンゴ人雇用主の資金不足のために支払いが遅延したり，未払いに陥る危険性が常に存在する開墾伐採労働よりも，現金が確実に入手できるフフ作りの方がザイール人労働者の人気は高い。

次に，出稼ぎ労働者と雇用主との関係について検討する。出稼ぎ労働者は畑地を保有する者に雇用され，その庇護の下に入るという形でなければ村に滞在できないことになっている。雇用者は，労働者から「パトロン（patron）」と呼ばれるが，彼らは労働者との間で，単なる雇用－賃労働関係ではなく，まさにパトロン－クライアント関係を持つことを期待されている。例えば，雇用主はある程度長期的に労働者を雇い，その間食事の面倒を見たり，労働者が病気の際は世話をする義務があるとされている。

ただしこれらの「義務」が厳格に履行されているわけではない。例えばザイール人出稼ぎを対象とする調査では，食事について，「パトロンと一緒に食べる（すなわちパトロンが完全に食事の面倒を見る）」と答えた者が7名いた一方で，「パトロンは全く面倒を見てくれない」と答えた者も12名いた。米や食用油などを毎月どのくらい労働者に与えるという一応の目安は存在するものの，食事の面倒を見るか見ないか，またどの程度面倒を見るかは千差万別であった。

村における雇用関係は，実際にはどのような形で展開しているのであろうか。筆者はザイール人労働者に各々の雇用主を尋ね，それを村人の名簿と照合して，誰が何人の労働者を雇用しているのかを調べた[32]。その結果を第4表に示す。

第4表　雇用労働者数別土地権利保有世帯数

雇用労働者数	世帯数	コンゴ人世帯数	うち不在地主	ザイール人世帯数	うち不在地主
8	1	1		0	
7	2	2	2	0	
6	1	1		0	
5	3	2		1	1
4	3	2		1	
3	8	6		2	
2	5	3		2	1
1	15	12	5	3	
0	33	17		16	
計	71	46	7	25	2

（出所）　筆者調査による。
（注1）　ザイール人世帯の土地権利保有世帯には，かつて一旦土地権利を認められながら，調査時には耕作を拒否されていた者（第6表の№14）も含まれている。
（注2）　「不在地主」の欄には，調査期間中不在であり，通常は村に居住していないと村人が認めた土地権利保有者を含めた。

この表から三つの事実を読みとることができる。第1に，雇用労働者数にばらつきが見られることである。8人の労働者を雇用する世帯がある一方，全く雇用労働者を持たない世帯も多い。雇用労働者数が多ければ耕作地面積も大きいと考えてよく，耕作地面積の大きさはフフ販売収入の多さを意味する。多数の雇用労働者を利用して多額のフフ販売収入を獲得する村人がいるという事実は，土地持ちの村人の間にもかなりの所得格差が存在する可能性を示唆している。第2に，不在地主の存在である。7人の雇用労働者を抱える不在地主が2人いるが，彼らはブラザヴィルに居住し，日常の耕作は全てザイール人の労働者に任せている。そしてフフを出荷したい時だけ労働者に連絡し，彼らが出荷したフフをブラザヴィルで受け取る。彼らはかつて村に居住していたために村の土地に対する用益権を確保している。しかしながら現在，彼らの生活の場は主として都市にあり，所得機会の一つとして農業を利用しているに過ぎない。第3に，労働者を雇用するザイール人が複数存在することである。この事実は，ザイール人全てが出稼ぎなのではなく，村での土地所有を許されているザイール人も存在することを意味している。以上の点を確認するために，第5表にB村を構成する世帯の内訳を示しておく。

第5表　B村構成世帯の内訳

	在村	不在	計
コンゴ人世帯	39	7	46
（うち土地権利保有世帯）	(39)	(7)	(46)
ザイール人世帯	126	2	128
（うち土地権利保有世帯）	(23)	(2)	(25)

（出所）　筆者調査による。
（注1）　コンゴ人世帯，ザイール人世帯の区別は，世帯主の国籍によった。
（注2）　実際に筆者が調査できたのは，在村の世帯のみである。不在世帯数は，雇用労働者からの聞き取りなどによって算出した。
（注3）　ザイール人世帯の土地権利保有世帯には，かつて一旦土地権利を認められながら，調査時には耕作を拒否されていた者（第6表の№14）も含まれている。

以上，キャッサバ生産のメカニズムについて，主として労働力の側面から検討を加えてきた。B村でキャッサバ生産が拡大する過程において重要な役割を果たしたのは，移住や出稼ぎによって増大する労働力と豊富な土地であった。その反面，農業経営において利用される資本は極めて僅かである。

この村に農業機械は全く導入されていない。近隣の村にはトラクターを所有している者もいるが[33]，B村にトラクター所有者はおらず，それによる賃耕も調査の範囲内では例がなかった。村人が所有する農具にも大きな差は見られず，農業労働者はほとんど自前の農具を持たないし，土地持ち農民が持つ農具も多くは蛮刀（マシェット），柄の短い鍬，そして斧に限られている。投入財についても，農薬や無機肥料は全く用いられず，植え付けたキャッサバの根元を枯れ葉で覆う程度でしかない。改良品種も導入されておらず，キャッサバをはじめとする作物は基本的に在来種を栽培している[34]。いずれにせよ，村人が農業生産にあたって投入財を市場で購入することはない。

このようにB村では，農業技術面での変化がないままキャッサバ生産が近年急速に拡大してきた。ここで生じたキャッサバ生産拡大は，技術一定のままで豊富な土地を利用し，出稼ぎ労働者の導入によって労働力のボトルネックを解消することで達成されたものであった。

4　生産ボトルネックの顕在化

ザイール人出稼ぎ労働者を利用しながらキャッサバ生産を拡大してきたB村

第6表　ザイール人の土地権利保有者一覧

番　号	雇用労働者数（人）	来訪年	権利取得年	(注1) 理由	(注2) 26000F	
1	3	1979	n. a.	B	×	
2	2	1987	n. a.	B	×	
3	3	1982	n. a.	A	×	
4	0	1985	1989	B		
5	0	1986	1993	A		
6	0	1982	1989	A	○	
7	1	1985	1990	A	○	
8	0	1984	1989	A	○	
9	0	1985	1993	A		
10	0	1986	1992	A	○	
11	0	1982	1989	C		
12	0	1987	1993	A	○	
13	0	1981	1991	A	○	
14	0	1987	1991	C		(注3)
15	0	1980	1990	C		
16	0	1987	1993	C	○	
17	0	1982	1983	C	○	
18	0	1986	1987	B	×	
19	0	1985	1987	A	○	
20	1	1993	1989	B	○	
21	4	1984	n. a.	B	×	
22	1	1987	n. a.	B	×	
23	0	1987	1993	A		
24	5	n. a.	n. a.	n. a.		(注4)
25	2	n. a.	n. a.	n. a.		(注4)

（出所）　筆者調査による。
（注1）　「理由」は，土地権利取得の理由を示し，Aは村長が許可した場合，Bは配偶者がコンゴ人である場合，Cはパトロンが死去するなどして賃金を支払えず，村長が耕作を許可した場合を指す。
（注2）　「26000F」は村長から2万6000フランを要求されたかどうかを示す。○は要求された者，×は要求されなかった者，空欄は不明・無回答である。
（注3）　1993年は土地不足を理由に村長から耕作を拒否された。
（注4）　不在地主。

であるが，近年新たなボトルネックが顕在化しつつある。それは土地をめぐる問題である。本節では，土地利用について説明を加えた後に，最近になって浮

上してきた土地をめぐる問題を検討する。

村人の認識において，村の土地は2種類に分けられている。すなわち「森の土地」（*Zamba*）と「平原の土地」（*Esobe*）である。「森の土地」とは以前森林であった土地を開墾したもので，サバンナを意味する「平原の土地」よりも肥沃である。B村はもともとサバンナと森林との境界線上に創られたが，畑の拡大とともに森林は後退し，今や村からかなり離れたマチ川沿いにしか森は残っていない。にもかかわらず，以前森であった土地は今でも「森の土地」として認識される。

両者の区別は用益権にかかわるために重要である。「平原の土地」は誰に断ることなく開墾し，畑をつくることが可能だが，「森の土地」を利用するためには村長が許可するか，協同組合に加入しなければならない。[35] コンゴ人であればその利用は原則として妨げられないが，ザイール人の場合は後述するようにいくつかの条件を満たさなければならない。また，商品化できるのは「森の土地」で生産された農産物のみであり，「平原の土地」における生産は自給的な目的に限定されている。ザイール人労働者は「平原の土地」で自給用作物を自由につくることができるが，「森の土地」を許可なく自らの利益のために開墾することはできない。

しかしながら，先述したように多くのザイール人が「森の土地」を利用してキャッサバ生産を行っている。調査時点では2名の不在地主を含む24名のザイール人が「森の土地」に自らの畑を有していた。第6表に「森の土地」に対して権利を有するザイール人世帯主の一覧を掲げる。[36] 彼らはいずれも「森の土地」の利用を許可されているが，その理由は三つに大別できる。

第1に，数年間農業労働者として働き，村人に一定の評価を受けた者が，村長の許可を受けて土地の保有を許される場合である。第6表の「理由」の欄では，Aがこれにあたる。村長の許可は，農業労働者として働きはじめてから概ね5年程度経ったところで，結婚などを機に与えられることが多いようである。協同組合に加入を許され，その結果として土地への権利を認められた場合もここに含めた。第2に，ザイール人労働者がコンゴ人女性と結婚する場合である。第6表ではBがこれにあたる。コンゴ人女性と結婚すれば，ザイール人男性は通常よりもずっと早く土地への権利を獲得することができる。結婚とほ

ぼ同時に権利を獲得することも多い。[37] これはB村の住民の中心であるバラリが母系制をとっており，したがって土地への権利を妻方の親族から獲得できるためであろう。第3に，雇用主が死亡したり，あるいは病気などのために賃金を支払えなくなった場合である。第6表ではCがこれにあたる。この際は，村が連帯責任を負う形で，「森の土地」の利用が許可される。これによってザイール人労働者は，「森の土地」を耕作して生産物を販売し，現金収入を得ることができる。

このように多くのザイール人が土地に対する権利を獲得できたのは，村の土地が基本的に豊富であったからである。しかし，村が開かれてから20年近く経った現在，状況は大きく変化した。村の後背地に大きく広がっていた森はほとんど消失し，畑にするための土地はもはや豊富と言えなくなっている。次のような事例がそれを端的に示している。

まず，ザイール人土地保有者に対する2万6000 CFA フラン要求の動きである。B村を創設したバラリたちが，もともとの地権者であったバテケに対して年間2万6000 CFA フラン支払っていた事実については既に述べたが，最近になって，「森の土地」に権利を有するザイール人の何人かは，代償として各自この金額を支払うよう村長から要求されている。土地を保有する全てのザイール人がそうした要求を受けているわけではなく，要求は選別的である。一般的な傾向としては，配偶者がコンゴ人である場合には要求を免れ，パトロンが賃金を払えなかったために土地権利を獲得した場合は支払いを要求されることが多い。

また，この要求の他にも，いったん「森の土地」の利用が認められたにもかかわらず，その後十分な土地がないことを理由に利用を断られるケースも出現している。S．N氏（第6表，№14）は，かつて自分が病気になった際コンゴ人の雇用主に十分な面倒を見てもらえなかったことを理由として，1991年に「森の土地」の利用を認められ，翌年まではそこで耕作を行った。しかし筆者が調査を実施した93年には，余分な土地がないことを理由に村長から「森の土地」の利用を拒絶されていた。S．N氏のように配偶者にコンゴ人を持たず，土地利用権を与えられて間もないザイール人の場合，村長の命令に対して逆らうことはできない。彼は再び労働者としてコンゴ人の下で働かねばならない。

ザイール人の既得権を脅かすこうした動きは，B村がもはや従来のような土地余剰の状態ではなくなったことを示している。先に述べたように，B村における市場向けキャッサバの生産拡大は，移動してきた労働力を豊富な土地に投入することによって達成されたものであり，外延的拡大という性格を持つものであった。しかし近年，こうした生産拡大の方向には明らかに限界が見えはじめている。土地はもはや豊富ではなく，これまでのような技術不変の状態では生産の大幅な増大は望めなくなっている。[38]

むすびにかえて

本稿で明らかにされたB村の変容とは，都市における食糧需要の増大に対応して，キャッサバをはじめとする農産物の商品化を進める方向に村が変化してゆく過程であった。もともと都市住民の入植によって誕生したB村は，眼前の市場機会に迅速に反応し，コンゴ人都市住民のさらなる移住やザイール人の出稼ぎを受け入れて，すなわち労働力投入量の増加によって農産物の生産増を達成した。これは農業生産技術面での変化がほとんど見られないまま生じた産出量の増加であり，豊富な土地資源を利用した耕地の外延的拡大に基づくものであった。

最後に，こうした農村変容をいかに評価するかを述べて結びとしたい。

B村の事例は，衰退や縮小といった言葉では表現され得ないコンゴの農村・農業の態様を明らかにしている。都市化率の上昇は，そのまま農村の衰退や農業の縮小を示すものでは決してない。特にB村のような都市近郊に位置する農村の場合，都市における食糧需要の拡大から生産物商品化への著しいインセンティヴを受けるのであり，本稿で示した農村変容はそれへの対応として理解できる。そして，ブラザヴィル向けキャッサバ製品が広汎な国内生産地から出荷されている状況を考えれば，[39] 広い地域の農民が市場機会に対して積極的に応じていると言えよう。

しかしながら，都市からの入植者や出稼ぎ外国人労働者を利用して急速にキャッサバ生産を拡大させたという点で，コンゴ農村全体からみればB村やその周辺であるマチの生産システムは特殊であろう。これは豊富な土地資源に，

やはり豊富に存在する労働力を投下することによって可能となった外延的な生産拡大であり，ミントが「余剰はけ口論」において想定した生産拡大のメカニズムに類するものと言える。(40)

こうした生産システムが成立した背景には，コンゴ，ザイール両国の経済危機と，それによって拍車をかけられた両国の通貨価値の格差拡大という要因がある。深刻な不況は都市における雇用吸収力を収縮させ，流通インフラの整備とも相俟って，都市部と近郊農村地帯の労働市場を連結させた。公的部門の新規雇用吸収力がほとんど無に等しい今日，都市における雇用の大部分はインフォーマルセクターに吸収される。マチにおける農業労働もまたその一環として捉えられるべきであり，B村の拡大はインフォーマルセクターの拡大過程として理解すべきであろう。また長期的な経済危機は，フランスフランというハードカレンシーによって価値を保証されたコンゴの通貨と，そのような保証を全く持たないザイールの通貨との間に，著しい価値の格差を生ぜしめた。このマクロ経済的状況変化によって，国境に近いマチはザイール人という安価な労働力を近在に抱えることとなった。キャッサバ生産の急速な拡大はこの安価な労働力を大量に動員することで達成されたものである。

耕地の外延的拡大によってキャッサバ生産を増大させてきたB村は，本格的な生産増が始まってから10数年が過ぎた現在，転機を迎えつつある。かつて森林であった村落の後背地はキャッサバ畑と休閑地の藪と化し，外国人にも比較的容易だった「森の土地」の利用権獲得はもはや困難となっている。農業技術に変化がないままで生じたキャッサバ生産の急速な拡大は，土地資源を急速に費消し，今度は土地がボトルネックとして立ち現れてきた。今後B村では，これまでのようなキャッサバ生産の伸びは期待できないであろう。

アフリカ諸国の中でも相対的に土地が豊富なコンゴでは，第2，第3のB村が登場して，当面はブラザヴィルへのキャッサバ供給を維持できるかも知れない。しかしながら，B村が短期間に飽和状態に達したことに示されるように，食糧生産の増大が耕地の外延的拡大に依存している限り，生産増は資源の食い潰しに過ぎず，食糧問題の根本的な解決は期待できない。今後は小農レベルでの農業技術水準の引き上げに政策的努力が向けられる必要がある。

本稿では，都市との連関において農村変容を捉えるという観点からB村の事例を検討した。この観点からコンゴの農村変容について踏み込んだ議論を行うためには，B村のように歴史の浅い村落の他に，伝統的な農村地帯における近年の変化を検討する必要がある。そうした農村における調査を今後の課題としたい。

注

(1) アフリカ諸国の都市化については多くの研究があるが，最近の邦文文献として例えば，小倉充夫「ザンビアにおける都市化の変容と経済危機」，佐藤章「西アフリカにおける都市化－コートジボワールを中心に」，いずれも小島麗逸・幡谷則子編『発展途上国の都市化と貧困層』アジア経済研究所，1995年，がある。

(2) 本稿で取り上げるのはコンゴ共和国（ブラザヴィル）の事例である。隣国ザイールは、1996年5月にコンゴ民主共和国と改称したが、本稿では混乱を避けるため全て旧名のザイールで統一した。

(3) République populaire du congo, Ministère du plan et de économie, Centre national de la statistique et des études économique, Annuaire statistique 1988, p. 7 より計算。

(4) 代表例として，André Guichaoua, Destins paysans et politiques agraires en afrique centrale, Tome 2 : La liquidation du "monde paysan" congolais, Paris, 1989, L'Harmattan，がある。

(5) キャッサバ流通に関する調査については，武内進一「コンゴのキャッサバ流通－生産地から消費地まで」（『アジア経済』第37巻第6号，1996年6月，29-58ページ）を参照のこと。

(6) キャッサバはイモ形態では保存がきかないため農村部で加工された後に出荷される。商品形態としては，シクワング（chikwangue），フフ（foufou），ビケディ（bikedi）の三つがある。シクワングとはキャッサバの澱粉質を抽出して蒸し上げたもの。フフは毒抜きをしたキャッサバを小片に切り分け，乾燥させたもの。ビケディは水に晒して毒抜きをしたキャッサバを袋詰めしたものである。ただし，ビケディがトラックで輸送されることはほとんどない。

(7) 武内進一，前掲論文41ページ。

(8) マチで生産されるキャッサバ製品が全てフフであるのも，慢性的に水が不足しているために，蒸し上げなどに際して大量の水を必要とするシクワングよりも，フフ生産が選好されるためである。

(9) この地域の年間降雨量は1400～1600ミリメートル，5月半ば～9月半ばが乾季である。

(10) マチ川の水は十分飲料水に適する。

(11) これは，世帯としての意思決定を行う際に男性が主導権を取ることが多いこと，また男性の方が自分の過去について詳しく話してくれ，インタビューしやすかったことによる。

(12) B村は新しい村であるせいか一夫多妻の世帯は稀である。村内の一夫多妻世帯はザイール人に1例があるだけで，彼らも同じ家屋に居住していた。一方，ザイール人出稼ぎ者を除けば，同一家屋に居住している人員を複数の世帯に分けて考えるべき事例も存在しなかった。一つの家に大勢が住んでいる単身者を例外とすれば，居住の単位を世帯と見做してさしあたり問題ない。

(13) ここで，コンゴ人世帯とザイール人世帯とは世帯主の国籍に応じて区別した。例えば，コンゴ人の夫とザイール人の妻がいる場合はコンゴ人世帯に，ザイール人の夫とコンゴ人の妻の場合はザイール人世帯に分類した。

(14) その場所はエタージュ（Etage）と呼ばれ，現在も村がある。

(15) ただし村人の全てがバラリに属するということではなく，他州の出身者は他の部族に属している。例えば，キューヴェット州やリクアラ州の出身者はンボシという部族に属する。一方，ザイール人については，首都のキンシャサを別にすれば，出生地に二つの地域的偏りが見られる。州別にみると，バ・ザイール州とエカトゥール州の出身者が過半を占めているが，その中でも前者ではチェラ（Tshela）！後者ではジョル（Djolu）という県（Zone）名を挙げた者が多い。この事実は，ザイール人労働者の間に地縁，血縁的なネットワークが存在し，彼らがそうした関係を考慮して出稼ぎ先を選択していることを示唆するものである。

(16) これはそのバテケが実際に以前B村に住んでいたからというわけではない。この地域がバテケの土地であるという認識は人々の間で共有されており，バテケはその土地を実際に利用していなくとも土地に対する権利は常に主張できるのである。この地代は象徴的な意味を持つに過ぎない。

(17) CFA フランはコンゴの通貨単位。1993年当時の交換レートで 1CFA フランは約0.4円。CFA フランは1994年1月12日まではフランスフランに対して50：1の比率でリンクしていた。その後，切り下げにより交換率は100：1に下落したが，フランスフランとの固定レート制は維持された。

(18) コンゴの協同組合運動については，Bernard N'Kaloulou, Dynamique paysanne et développement rural au congo, Paris, 1984, L'Harmattan ／ G. Nguyen Tein Hung, Agriculture and Rural Development in the People's Republic of the Congo, Boulder, 1987, Westview ／ FAO, Rapport du programme de coopération FAO ／ Banque mondiale. République populaire du congo. Projet sectoriel agricole. Rapport de la mission d'Ientification. November 18, 1985.等を参照。

(19) FAO, Food Balance Sheets; 1984－1986 Average, Rome, 1991, p. 76.

(20) Serge Trèche et al., Fabrication de chikwangue au congo, Paris, ORSTOM, p. 23.

(21) 筆者はコンゴ滞在時，1993年1月～1994年1月にかけて，ブラザヴィルの10世帯を対象に食事の調査を行った。

(22) ブラザヴィル住民のキャッサバに対する選好は価格の安さのみに起因するものではなく，より文化的なものである。例えば，米の小売価格はキャッサバ製品とほとんど変わらないにもかかわらず，住民は多くの場合キャッサバを選好する。住民にその理由を尋ねると，パンや米では「腹持ちが悪い」という回答が返ってくる。ちょうど3度の食事がすべてパンでは物足りなく思う日本人が多いのと同じであろう。この意味で，コンゴにおいてキャッサバは劣等財とは言えない。

(23) République populaire du congo, CNSEE, Annuaire..., p. 82.

(24) République populaire du congo, CNSEE, Annuaire..., p. 132 より計算。

(25) ザイール貨については，1ドル＝0.5ザイールの固定レートが1976年3月まで続いたが，その後は一貫して切り下げが続き，特に1990年代に入ると政治的混乱を背景に通貨価値が暴落した。1993年10月，1ドル＝700万ザイールとなった時点でデノミネーションを実施し（300万旧ザイール＝1新ザイール），1ドル＝3新ザイールという新たなレートを設定した。しかし，通貨価値の下落は新ザイールに単位が代わった後も止む気配を見せていない。

(26) A. Guichaoua, Destin paysans..., pp. 113-114.

(27) この移住は自発的なものであり，政策的に進められたものではない。コンゴ政府はこれまで何度か都市住民の農村への移住を奨励してきたが，村での調査において，移住の動機として政府の指導を挙げたものは一人もいなかった。

(28) 学名不明。蔓状の作物でそのまま煮て食する。

(29) 普通はドラム缶などの大樽に雨水を溜め，その中に数日入れておく。

(30) 50キログラム入りの小麦粉の袋を，さらに上方に三分の一ほど継ぎ足す形で伸ばして，その中にぎっしりフフを詰める。

(31) ただし，日雇いでフフ作りを行う場合は，支払いも現金となる。この場合，ドラム缶一つに入るキャッサバの量が単位となり，それだけのキャッサバを掘り出して皮を剝き，ドラム缶に入れて水に晒すところまでの労働が750 CFA フラン，それを細分して乾燥させ，袋詰めするまでの作業が250 CFA フランである。

(32) コンゴ人世帯主と土地を所有するザイール人にも雇用労働者数を尋ねたが，その結果はザイール人労働者の回答とあまり一致しなかった。これにはいくつかの理由

がある。まず，雇用主は労働者の通称しか知らず，通称だけからは本名の同定が困難である。また，雇用主はしばしば労働者数を多めに申告する傾向があり，去年雇用した労働者やごく短期の日雇い仕事で雇った労働者なども勘定に含めることがある（日雇い仕事は手の空いた労働者が自由に従事してよい）。したがって，雇用主側の申告はあまり正確でないと判断し，労働者側の申告を採用することにした。

(33) ブラザヴィルからB村に来る途中，B村の15キロメートルほど手前では，平原をトラクターで開墾して大規模なキャッサバ生産が行われている。ここには数軒の住居とトラクターがあるだけだが，見渡す限りキャッサバが単作で栽培されている。トラクターの所有者はB村に毎週2回やってくるトラックの所有者であり，彼はザイール人の出稼ぎ労働者を使って大規模な畑を耕作している。

(34) フフ作りに向けられる苦種のキャッサバに関しては，この地域には主として3種類が存在するが，その中でも特に生産性が高いとされる品種（B村では Nzete ya Mbongo と呼ばれる）はコンゴ北部から伝播したと言われている。

(35) 協同組合への加入には村長の許可が必要であり，またこれに加入すれば自動的に「森の土地」に対する権利を獲得できるから，「村長の許可」と「協同組合への加入」とは事実上同義である。B村の人々が元々の地権者であったバテケに対して，村の協同組合の活動を理由に地代の支払いを拒否したことは既に述べた。協同組合は実際の経済的機能という点ではかつてもそれほど重要な意味を持たなかったし，現在は全く意味を失っている。しかし，それは現在もなお，「森の土地」における土地保有を許可する基準として，すなわち村人を正規の成員と出稼ぎ労働者とに選別する基準として，B村の人々に認知されている。それは現在，いわば村落共同体の象徴としての機能を担っていると言えよう。

(36) 第6表には25名が記載されているが，うち1名（№14）は後述するように調査時には土地利用権を剥奪されていた。

(37) 村にはザイール人女性を妻に持つコンゴ人男性が6名，コンゴ人女性を妻に持つザイール人男性が7名いた。この中で土地に対する権利を有していないのは，ザイール人の男性と結婚したコンゴ人女性の娘（バラリは母系制のため，彼女はコンゴ人と見なされる）がザイール人男性と内縁関係になっている場合の1例のみであった。

(38) 土地に対する需要は逼迫しつつあるが，まだ土地取り引きが常態化するような状況ではない。B村には畑地売買の経験を持つ村人が何名かいるが，土地はキャッサバが植え付けられた状態で売買され，その価格は植え付けられたキャッサバを販売したときに得られるであろう価格水準にほぼ等しかった。これは，土地の取り引きというよりはそこにおける生産物の販売権の売買と見なすべきであろう。

(39) 500キロメートル以上も離れた地域からも大量のキャッサバ製品がブラザヴィル向けに出荷されている（武内「コンゴのキャッサバ流通…」）。

(40) ミントの「余剰はけ口論」については，例えば，H．ミント『開発途上国の経済学』木村，渡辺共訳，東洋経済新報社，1981年，などを参照のこと。マチで生じたキャッサバ生産の急増は，外部（都市）で発生した有効需要に対応し，差額地代（都市へのアクセスが良好で，かつ豊富な土地資源）を利用することで達成されたという点でミント理論の枠組みに適合する。マチの生産拡大過程では，安価なザイール人出稼ぎ労働力の存在が決定的な重要性を持っており，この点は別の文脈で論じなければならない。ザイールとの国境に近いマチは，上記の土地資源に加えて，近在に無限に存在する安価な労働力というレントを利用したと言えよう。